

## 「コミュニケーション・ライティング」における定期考査の工夫

### 1 はじめに

本校では、5年前より「Oral Communication I」と「ライティング」の授業改革に取り組んできた。2年次と3年次の「ライティング」では、1年次の「Oral Communication I」を発展させ「書く活動」と「話す活動」を統合したアプローチを導入し、「コミュニケーション・ライティング」を実践している。2年次では、日常的な話題について、会話活動や自由英作文活動を行い、3年次では、社会的な話題について、ディスカッションやディベート活動、そしてエッセイライティング活動を行っている。本校が目指しているのは、コミュニケーション能力の育成のための3年間の継続的な指導である。

2年次、3年次の「コミュニケーション・ライティング」の授業実践と同時に、評価方法も大きく変えてきた。ポートフォリオ評価、トピックごとの英作文作品の評価、ディスカッションやディベートによるスピーキングテストの評価、録音した会話の自己評価など *alternative assessments* を積極的に導入し、授業内のコミュニケーション活動を評価してきた。また、定期考査を複数の評価方法の一つとして捉え、授業内のコミュニケーション活動を評価できるように問題を改善してきた。

このような評価は、教員、生徒の両者にとって新しい試みなので、次のような工夫をした。

- (1) 授業の到達目標と評価計画、評価方法について、年度初めのオリエンテーションで生徒に説明する。
- (2) 定期考査は、問題形式や問題の内容、自由英作文の評価規準を事前に知らせ、何をどのように勉強したらよいかを提示し、努力させる。
- (3) トピックごとの英作文作品の評価規準とスピーキングテストの評価規準は、事前に生徒に知らせ、目標を持たせる。また、分析的採点法を採用し、評価の結果を基に生徒自身が次の目標を設定できるように配慮する。
- (4) 自己評価を導入し、自己学習能力を高める工夫をする。ビデオ録画した会話やディベートを自己評価する活動を1年間継続するとともに、ポートフォリオを利用した自己評価レポートを年に3回書き、自己の学習過程を振り返る機会を与える。

### 2 定期考査の工夫と授業改善

「ライティング」の評定計画は以下のものである。

<評価計画>

- (1) 定期考査：40%
- (2) スピーキングテスト（会話、ディベート）：20%
- (3) Fun essay（英作文作品）：20%
- (4) 宿題（英作文課題、ビデオ録音した会話やディベートの筆写と自己評価）：15%
- (5) ポートフォリオと自己評価レポート：5%

授業のコミュニケーション活動を反映した定期考査問題を作成し、テスト勉強と授業内活動がリンクするように工夫した。例えば、80語程度の自由英作文問題や自分の考えを書く問題、会話文問題、リスニング問題を定期考査に出題した。

ライティングの授業では、「書く活動」と「話す活動」を統合したアプローチを導入しており、いずれの活動においても、常に読み手や聞き手が存在する *interactive* な活動を設定している。このようなコミュニケーション活動を1年間続けていくには、コミュニケーション活動をどのように評価していくかが大きな課題となる。新しい評価方法や定期考査の問題改善に取り組むことにより、授

業担当者間で評価規準や考査問題を協議してきた。その結果、徐々に指導目標や指導技術を共有できるようになり、評価の結果をフィードバックしながら、長期にわたり日々の授業改善に取り組むことができた。

### 3 定期考査の工夫の具体例

3年ライティング前期中間考査においては、以下の工夫を行った。和文英訳の問題は1題も出題しなかった。授業内活動を反映して自分の意見を書く自己表現問題を多く出題し、46点分の配点とした。

#### <テスト問題について>

[1] リスニング問題。必要な情報を聞き取る問題。

- ・ 授業では、‘I can’t stop!’というトピックで、繰り返し会話をしてきたので、相手が話す内容を聞き取る問題を出題した。会話文は、定期考査で初めて聞くものである。
- ・ 必要な情報を聞き取るためには、1－5までの英文を「速読する力」、聞き取った単語を「正確に書く力」があるため、実際には総合的な力が必要である。

結果

- ・ 配点8点。学年平均2.4点。
- ・ 授業ではわからないときには、何度も聞き返すことを強調してきたので、会話文を2回繰り返す問題にすべきであった。

[2] 教科書と同じモノローグのリスニング問題。

- ・ 教科書と全く同じモノローグの文を、リスニング問題の空所補充形式で出題した。もう1度モノローグに出てくる表現を復習してほしいというねらいで出題した。

結果

- ・ 配点10点。学年平均7.2点。
- ・ モノローグは2回繰り返したが、既出の英文なので1回にすべきであった。
- ・ 200語程度のモノローグであるが、文を暗記することもできるので、リスニング問題として不適當であった。英語が苦手な生徒のために、単純で勉強しやすい形式にしたいという意図で出題した。

[3] 語彙。

- ・ 英単語の定義文を読み、単語を選ぶ問題である。ここで取り扱った10個の単語は、授業での会話活動やリスニング活動で使用した単語である。授業では、単語の導入の際に、定義文を用いることは特にしていない。しかし、英語で授業を行っているので、単語や表現の説明などは必要があれば英語で行っている。また、会話活動では、わからない表現は‘What does that mean?’と尋ねる練習をしているので、英語の言い換え表現にどれだけ慣れているのかをみる問題として出題した。この問題の出題に関しては、事前に予告をしなかった。

結果

- ・ 配点10点。学年平均7.6点。
- ・ トピックに関する語彙の定着度を測定することができた。授業での会話活動や英作文活動に積極的に取り組んでいる生徒は正答率が高かった。

[4][5][6] 会話文完成問題。

- ・ 授業では、‘I can’t stop!’‘My Pet Peeves’というトピックで繰り返し会話をしてきた。テストでは、適切な表現や質問を選んで、会話を完成するという問題で出題した。会話文は、定期考査で初めて読むものである。

結果

- ・ 配点20点。学年平均13.2点。

- ・ 授業では、ペアの相手を何度も替えてトピックについて会話をしている。つまり、トピックについて様々な会話を経験しているので、考査で初めて読む会話文が出題されても生徒は違和感なく取り組んでいた。

[7] 会話文整序問題。

- ・ 授業では、follow-up questions を使いながら、3～4分間の会話活動を行ってきた。テストでは、6つの文を並べかえる箇所が2つある整序問題として出題した。会話文は、定期考査で初めて読むものである。

結果

- ・ 配点10点。学年平均4.5点。
- ・ 6文を整序することは難しく、得点差が大きかった。6文も整序する必要があるのか再検討する余地がある。

[8][9][10] 自分の意見を書く問題。

- ・ 授業でトピックの導入で用いた会話活動を、「自分の意見を書く問題」として出題した。授業のコミュニケーション活動を反映させた問題である。

結果

- ・ [8] 配点6点。学年平均2.8点。
- ・ [9] 配点10点。学年平均5.4点。
- ・ [10] 配点10点。学年平均6.8点。
- ・ スペリングの間違いや文法の正確さよりも、内容と文の数を重視することを事前に伝えたので、英語の苦手な生徒も意欲的に取り組むことができた。白紙の答えはほとんどなかった。

[11] 自由英作文問題。

- ・ 授業では、「I can't stop!」というトピックで英作文を書いており、最終作品(fun essay)として15文から20文程度の英作文作品に取り組んでいる。テストでは10文程度で英作文を書く問題として出題した。
- ・ 授業では、書く過程(peer-editing, rewriting, fun essay)を重視してきた。伝えたい内容が固まったところで、もう一度自分のことを伝えるのに必要な表現を定着させたいという意図で出題した。

結果

- ・ 配点16点。学年平均12.4点。
- ・ 英語が苦手な生徒も、意欲的に取り組む姿がみられた。英語が苦手でない生徒は、スペリングや文法的誤りがないように努力することができた。

<自由英作文の評価規準について>

[8]～[11]まで問題は、自由英作文である。問題と評価規準については、生徒に事前に知らせた。授業のペア活動や自由英作文活動で、自分の考えを表現してきたことを出題した。授業と同様、正確さより流暢さや内容を重視した。今回の自由英作文の評価基準は、次の通りである。

**[8]「Teresa にどうしたらギャンブルがやめられるかアドバイスをしてください。3文以上書きなさい。」**

**(12点)**

文の数と内容(A=good B=fair C=poor)の2観点で評価し、内容を重視した。ただし、意味不明の文は、文の数としてカウントしない。

	内容 A	内容 B	内容 C
3 文以上	6	4	2
2 文	3	2	1
1 文	1		

[ 9 ] 「次にあげる4つの態度から1つを選び、その態度について次の2つの問いに答えなさい。」

Q1 Does it bother you? Q2 Why? Why not? (4点+6点)

Q1 スペリングの誤りは1点減点。構文の誤りがある場合は-2点。文で書いていない場合は-2点。授業では、Yes, it does.ではなく、Yes, it really bothers me! Yes, it bothers me. No, it doesn't bother me. と答える会話活動をしてきたので、定期考査でも同様に文で答えることを評価基準に入れた。

Q2 は、文の数という1つの観点で理由が書けているかどうかだけを評価した。意味不明の文は、文の数としてカウントしない。スペリングの誤りは減点しない。

理由が2文以上書けている。 6点。

理由が1文書けている。 3点。

[10] 「Q1 What is your pet peeve? Q2 Please tell me your experience. という問で自分の経験を3文以上で書きなさい。」(4点+6点)

Q1 スペリングの誤りは1点減点。構文の誤りがある場合は-2点。文で書いていない場合は-2点。授業の会話活動では、My pet peeve is when ... または I hate it when ... と答える活動をしてきたので、定期考査でも同様に文で答えることを評価基準に入れた。

Q2 は、文の数という1つの観点で、自分の経験が書けているかどうかだけを評価した。意味不明の文は、文の数としてカウントしない。

経験が3文以上書けている。 6点。

経験が2文書けている。 4点。

経験が1文書けている。 2点。

[11] 「I can't stop!というトピックで、10文以上の自由英作文を書きなさい。」(16点)

文の数、内容、文法の3観点で評価した。文の数を中心に、まず長さ点として基本の点数を与え、それぞれの長さに応じて内容点(A=good B=fair C=poor)と文法点を設定した。5語以上の文を1文と数え、4語以下の文は、0.5文とした。

内容(A=good B=fair C=poor)

	長さ	内容	文法(何箇所誤りがあるか。)
10文以上	6点	A=6点 B=4点 C=2点	0-5個:4点、6-9個:2点 10個以上:0点
8-9文	5点	A=6点 B=4点 C=2点	0-4個:3点、5-7個:1点 8個以上:0点
6-7文	4点	B=4点 C=2点	0-3個:3点、4-5個:1点 6個以上:0点
4-5文	3点	C=1点, 0点	0点
2-3文	2点	0点	0点
1文	1点	0点	0点

#### 4 定期考査問題における工夫と生徒の取り組みの総括

##### ①波及効果

授業内活動で取り組んだことを問題として出題したので、授業のコミュニケーション活動に積極的に取り組むようになった。特に、英語が苦手な生徒が、「授業に積極的に参加して、自分の意見を表現できるようになれば、定期考査の問題にも取り組みやすい」ということがわかり、自由英作文活動や会話活動に積極的に参加するようになり、英語学習に対する自信をつけていった。

## ②文法

生徒が書いた英作文から、文法的誤りの多い表現をとりあげた Common Mistakes のプリントを用いて、文法項目や構文を復習し、「誤り訂正」の問題として定期考査に出題して、文法項目や語彙表現の定着度を図る予定であった。今回は、授業内で Common Mistakes の表現を復習できず、「誤り訂正」の問題を出題しなかったため、文法面での定着度を測定することができなかった。生徒は peer-editing 活動で誤りを訂正することが苦手である。また、「書く」過程では、正確さよりも流暢さを重視しているため、定期考査で「誤り訂正」の問題を出題して、言語形式に注目する機会を与える必要性を強く感じた。次回からは必ず出題したい。

## ③自由英作文活動

授業では、何度も英文を書き加えたり、書き改めたりしながら、最後に fun-essay 作品を仕上げている。辞書を使いながら、時間をかけて書く活動の後に、定期考査で、制限時間内に辞書を用いないで書くことに挑戦させてきた。定期考査に向けて、何度も英文を書いて、語彙表現を定着させることができた生徒が多かった。fun-essay の英作文評価では、英文の長さ、内容、イラストという3つの観点で評価しているため、定期考査の英作文では、文法の評価規準を設けて、言語形式に注目させることができた。書く能力の評価は、fun-essay 作品の評価が主であるが、定期考査の自由英作文問題でも評価し、評価方法を変えて複数回評価していく。

## ④会話活動

授業では、トピックについて討論するという形式で、会話活動に取り組んでいる。会話活動は、年に3回実施するスピーキングテストで評価しているが、定期考査では会話文の並べかえや会話文の空所補充の形式で出題した。既出の会話文ではないので、直前のテスト勉強では対応できない。間接的な測定方法であるが、授業で会話活動に積極的に参加して、会話表現を身に付けたかを測定することができた。授業で会話活動に参加しないと、スピーキングテストも定期考査の問題も解けないという状況になるということを、生徒も認識していたようである。話す能力の評価は、スピーキングテストの評価が主であるが、定期考査の会話文問題でも評価し、評価方法を変えて複数回評価していく。

## 5 まとめ

コミュニケーション活動を導入して、授業改革に取り組んでも、評価が変わらなければ、継続的に授業改革を推し進めていくことはできない。授業内のコミュニケーション活動を評価するためには、定期考査以外の評価方法を積極的に取り入れると同時に、定期考査の問題そのものを改善する必要がある。定期考査の問題については、今年度、授業内のコミュニケーション活動とリンクした問題を出題することから取り組んだ。問題形式や評価規準に関しては、さらに改善の余地があるが、自分の意見を書く問題を毎回50点分ほど出題し、80語程度(10文以上)のまとまった自由英作文を書く問題を、必ず出題してきた成果は大きい。定期考査の問題と評価規準が、授業内活動や指導目標とほぼ一致していたので、生徒がコミュニケーション活動に積極的に参加するという望ましい「波及効果」が得られた。コミュニケーション活動を評価する方法の一つとして、定期考査を位置付け、これからも指導と評価の一体化を目指して、問題形式や評価規準を工夫していきたい。